

\*\*\*\*\* シラバス \*\*\*\*\*

- 1) 記号と言語の一般的特質  
ソシュールの発見<sup>p. 2, 169</sup>  
記号とは何か<sup>p. 4~, 13, 31</sup>  
言語の機能
- 2) 19世紀までの言語学  
比較言語学と系統論<sup>150~</sup>  
古典的類型論<sup>160</sup>
- 3) その他の言語学の諸分野<sup>18</sup>
- 4) 形態素とは<sup>44~</sup>
- 5) 構造主義とは何か<sup>27, 60~</sup>
- 6) 統語論の展開と生成文法、その後の研究<sup>58~</sup>

\*\*\*\*\* デジタル板書（テキストの補足）\*\*\*\*\*

※以下はレジュメではなくテキストの補足。説明を足す必要がない項目は取り上げていない。

#### 1) 記号と言語の一般的特質（テキスト第1章）

##### ソシュールの発見<sup>p. 2, 169 p. 13コラム</sup>

近代言語学と記号論はソシュールから始まるとされる。言語の一般的特質の多くはソシュールによって発見された。

言語の2つの側面をラング/パロール<sup>p. 8</sup>として定義。概念化やカテゴリー化によって言語を獲得・運用する能力をランゲージュと呼んだ。

中世までは言語神授説が広く信じられていた。

ソシュールは言語命名論も否定。

既に存在する対象に名札を貼ることで語が生まれるのではない。語が生まれることで、シニフイエ(→p. 4)としての概念が成立するのだ。

「言語とは記号の体系である。」

「言語とは社会習慣である。」

#### 【統合（統辞・連辞）関係・syntagmatic relation

および連合（範列・範例）関係・paradigmatic relation】

語（または形態素）相互の関係には2種類ある。前者は語などが線的に結合し文構造を作るもの。後者は置き換え可能な語の住み分けの関係。

ソシュールは、個々の記号は単独で存在するのではなく、他の記号と区別される差異によって意味を持つ、とした。→体系性

#### 【能記の線状（条）性】

ソシュールは、言語記号は順番に一つずつ口に出すしかないの、能記は線状に現れる、とした。

※後にヤーコブソンが一部を否定。アクセントにより語が弁別される言語(雨と飴が区別される言語)においては、音素と同時に送り出されるアクセントは「かぶせ音素」である、とした。

【統合（統辞・連辞）関係・syntagmatic relation

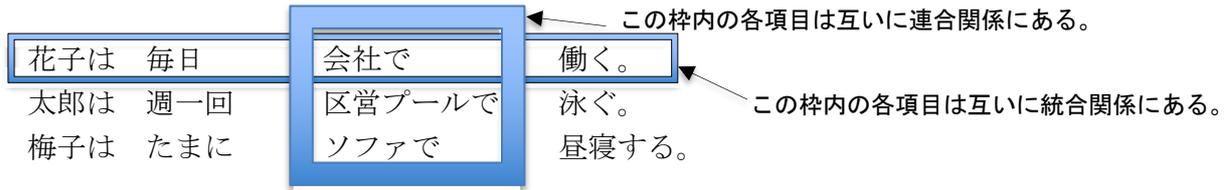
および【連合（範列・範例）関係・paradigmatic relation】

ソシュールが言語の構造の説明として提出した概念。語（または形態素）相互の関係には2種類ある。

統合関係……語などが線的に結合し文構造を作るもの。

連合関係……置き換え可能な語の住み分けの関係。

連合関係……置き換え可能な語の住み分けの関係。



【二重分節】<sup>p.7</sup>

言語の単位が、音の単位（音素がその最小のもの）と意味の単位（形態素がその最小のもの）の二段に分かれるということ。この仕組みにより、人間の発声できるオトの種類が限られているにも関わらず、人間の言語は無限の生産性を獲得した。

マルティネの研究が有名（ソシュールも触れてはいる）。

オトの分節もイミの分節も、言語により分け方が異なっており、恣意的である。

●【記号とは何か】<sup>p.4~13,31</sup>

【記号】

所記（シニフィエ、記号内容、表され）と能記（シニフィアン、記号表現、表し）が社会的合意により結びついたものを記号という。記号のうち言語の単位であるものを言語記号という。

（→最小の言語記号は形態素である。<sup>p.44</sup>）

【象徴】

「記号」と異なり安定した明確な定義はなく、個々の記号論の研究者によって使い方が多少違う。

一般に、記号性はあっても媒体それが指し示す概念との関係が恣意的ではなく、一定の結びつき（強い有契性↓<sup>後述</sup>）があり、かつシニフィエが明確ではないものを指す。

【音象徴語（オノマトペ）】

「カタカタ、カチッ、ゆらゆら」等、語形が鳴き声や物理音を描写したり、感覚を表したりするもの。他言語の話者には理解しがたい場合が多い。

古代にはオノマトペから多くの語根が発生したと見られる。英語の基礎語彙にもオノマトペであったと想像されるものが少なくない(gargle, spank等)。

▶言語記号の恣意性について <sup>p.5</sup>

ソシュールによれば、テキストに書かれているように、二つの恣意性がある。これは言語記号に限らず、全ての記号について言える。

(1)所記と結びつく能記の恣意性……ある所記に対する能記はなんでもよい。（通常、単に「記号の恣意性」と言えばこちらを指す。）

※後にプラーグ学派の言語学者ヤーコブソンや心理学者ケーラーなどによる音象徴の研究によって、能記の音が与える印象と所記は無関係とは言い切れないとして、部分的に否定された。

(2)所記の分節の恣意性……概念をどう切り分けるかは言語により異なる。（↑分節, 二重分節 <sup>p.6~</sup>）

### 【有/無契性】

その記号の能記が所記を連想させる場合は、有契的である。

一般に、複合語や慣用句は有契的なものとして作られるが、時代とともに無契的になっていく。

〔例〕 餞はなむけ（馬の鼻向け） 手薬煉てぐすねを引く

※語が有契性を失っても問題ない（話者が慣用句の由来を気にしない）のは、能記と所記の関係が本質的に恣意的であるため。その点は言語記号以外の記号も同様。

### ●言語の機能

言語の機能を分類・説明する試みとしては、ヤコブソン（1896 露～プラハ～1982 米）による以下の「言語の6機能」（1960『言語学と詩学』）が有名。※順不同

主情的機能 emotive function……話者の心身の状態や心的態度を表出する機能。

動能的（訴えかけ）機能 conative function……聞き手を動かそうとする機能。※conative は心理学用語。

指示的(参照)機能 referential function……状況を描写・解釈・記録する機能。コンテキストに焦点がある。

交話的機能 phatic function……挨拶や天気の話など、言葉を交わすことで接触する機能。

メタ言語的機能 metalingual function……言語によって言語コードを確認したり説明したりする機能。

詩的機能 poetic function……「メッセージそのものへの指向」。ヤコブソンは言語のオトに注目し、ある連合関係の中での選択が（韻を踏むことなどによって）同じ統語関係の他の箇所を選択を支配してしまう、と考えた。

### 3) 19世紀までの言語学（テキスト第7章 150～）

※共時言語学が中心になったのはフェルナン・ド・ソシュール以降。ただしソシュールも通時言語学から出発し、10代前半～20代で優れた論文を発表したp.13。

※方言学・言語地理学は基本的に共時態での研究だが、ソシュール以前に誕生した。

### ●比較言語学と系統論……印欧語族の発見<sup>150～</sup>

ウィリアム・ジョーンズが、1786年に行った講演で、現在印欧語族とされる諸言語の類縁関係を指摘した。19世紀に特にドイツで盛んに研究され、印欧語族の存在が確認された。また種々の音韻法則（グリムの法則p.158、ヴェルネルの法則）が見出された。

参考▶ 同系（祖語の共有）の証明に必要とされるもの

(1)文法組織の類似

(2)音韻対応（できるだけ多くの基礎語彙について見つかること）

(3)具体的な機能語の音韻対応が発見できれば強力な証拠になる

### 【共通祖語（基語）】

ある語族の始祖となる言語として想定されるもの。

現在では、シュライヒャーが考えたような「単一の祖先である言語」の存在はフィクションであるとする言語学者が多い。（古い時代ほど一つの言語の通用域は狭かったはず。また分かれた言語同士がその後接触し相互に影響を及ぼさなかったとは考えにくい。～独・シューハルト）

しかし言語間の類似性を示すには便利であるため、現在もよく言及される。

【語派】一つの語族が枝分かれした後の、比較的近い先祖を共有するグループ。「姉妹語」は同じ語派に属する言語同士を指すことが多い。e.g. 英語とドイツ語は、どちらも印欧語族ゲルマン語派の西ゲルマン語派（語群）に属し、姉妹語の関係にある。

【諸語】①語族であるかどうか未確定だが何らかの関係があると思われる言語のグループ。類似点が多い複数の語族をまとめて呼ぶ場合もある。②ある語族や語派に属する諸言語。

## 【語族・語派等の分類の一例】

語族等	下位グループ	代表的な言語
印欧語族	インド語派	ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語
	イラン語派	ペルシャ（ファルシ）語、パシュトゥン語
	アルメニア語派	アルメニア語
	ギリシア語派	ギリシア語
	イタリック=ロマンス語派	イタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語
	ゲルマン語派	英語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語
	スラヴ語派	ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、ブルガリア語
	ケルト語派	アイルランド語、ウェールズ語、ブルターニュ語
	バルト語派	リトアニア語、ラトビア語
ウラル語族	フィン・ウゴル語派	フィンランド語、ハンガリー語、ラップ語
	サモエド語派	ロシア北部のモンゴロイドの諸言語
アルタイ語族	ツングース語派	満州語、ウイラタ語
	モンゴル語派	モンゴル語、ブリヤート語
	テュルク語派	トルコ語、タタール語、カザフ語、ウイグル語、ウズベク語
シナ・チベット語族	チベット・ビルマ語派	チベット語、ビルマ語、カレン語
	シナ語派	中国諸語、ミャオ語、
タイ・タガイ語族		タイ語、ラオ（ラオス）語
ドラヴィダ語族	北/中南/中/南部の各語派	タミル語、マラヤーラム語（ともに南部語派）
オーストロアジア語族	モン・クメール語族	ヴェトナム語、カンボジア語
	その他の諸語	ムンダ諸語、ニコバル諸語
オーストロネシア語族	インドネシア語派	ジャワ語、アチェ語、タガログ語、マレー（ムラユ）語
	メラネシア語派	ニューギニア諸語、ソロモン島諸語
	ポリネシア語派	ハワイ語、タヒチ語、マオリ語、サモア語、トンガ語
極北諸語	シベリア～樺太周辺の諸言語	シベリア～樺太周辺では：ユカギール語、ギリヤーク語、
北米諸語	※複数の語族に分かれる	アリュート語、ヤクート語、スー語族、アルゴンキン語族
中米諸語	同上	アステック語族、マヤ語族
南米諸語	同上	ケチュ語族、カリブ語族
ニジェールコンゴ語族	バントゥー諸語、ゲル諸語	スワヒリ語・ズールー語（バントゥー系）
ナイルサハラ語族	※複数の諸語に分かれる	中央スーダン諸語
アフロアジア語族	セム語派	アラビア語、ヘブライ語、エチオピア諸語
	その他	古代エジプト語、ベルベル諸語
コイサン語族		コイサン諸語
孤立語	日本語族	日本語、琉球語、伊豆諸島諸語
		韓国朝鮮語、アイヌ語、ニヴフ（ギリヤーク）語
その他		バプア諸語、ニュージーランド諸語、オーストラリア諸語

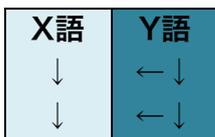
※複数の語族の上位グループを拡大語族や諸語と呼ぶこともある。

## ▶言語接触による変化 p. 153

※文法組織や語彙の基幹的部分を残したものを言語上層とみなす。

<b>Y語（上層言語/言語上層）</b>
<b>X語（基層言語/言語基層）</b>

例えば、ガリア（概ね現在のフランス）の住民の多くはケルト系言語を話していたが、シーザーの征服により俗ラテン語が浸透して混成言語が誕生し、フランス語が成立。文法組織と語彙成分の大部分はラテン語を受け継いでいるので、ラテン語が言語上層。ケルト語の**基層作用**により音韻はラテン語から大きく変わった。



隣り合う地域で行われる複数の言語は互いに**言語傍層**の関係にあり、通時的に影響を及ぼしあいながら変化する。片方が他方に一方的に影響を与える場合もある。

## ●古典的類型論 p. 160

形態的類型論(morphological typology)とも。語基（内容形態素。実質的概念内容を表す）と接辞（機能形態素。文法的機能を表す）との関係により分類。

系統によらず言語をタイプ分けする点では対照言語学の一つだが、19世紀の比較言語学の大家シュライヒャーの**古典的三類型**に始まるため、テキストでは「歴史・比較言語学」の章で扱っている。

## 4) 形態素とは (テキスト第3章 形態論 p. 44~)

指定テキストの一部の章は、テクニカルタームの使い方に不統一な点があり、説明不足でわかりにくいと思われるので、以下に補足する。

**注意!** 言語学は基本的に輸入の学問であるため、同じ概念が違う訳語で示されることがある。また訳語の問題とは関係なく、同語形・同表記であっても別の概念を指すことも珍しくない。ただし過去の試験では、例を示すなどして、どのような定義で使われているかわかるように出題されているので、あまり神経質にならないこと。

**【形態素】** p. 44 最小の言語記号を形態素という。語は一つ以上の形態素によって構成される。

**【語幹】** p. 45

ここでは活用語尾に対して変化しない部分を指している。学校文法では仮名単位(≒音節単位)で分けるので、「書く」の語幹は「か」、「食べる」の語幹は「たべ」だが、音素単位で分ければ {kak-} と {tab-} となる。一段動詞については、『よくわかる言語学入門』p. 47は共通部分を全て語幹としているので、一段動詞には未然形や連用マス形の活用語尾がなく、ナイやマスは語幹に直接つくことになる。この立場から五段動詞を「子音幹動詞」、一段動詞を「母音幹動詞」と呼ぶこともある。

印欧語に関しては、「語幹」は人称語尾や格語尾などの屈折接辞(※後述)を除いた部分(stem)を指す。名詞等の不活用語も含めて、語の接辞ではない部分(=base)を指す意味でも使う。この場合は「語基」と呼ぶほうが混乱がない。

	五段活用=第1グループ	一段活用=第2グループ
未然のナイ形	<b>kak</b> i-a-nai	<b>tab</b> e-nai
連用のマス形	<b>kak</b> i-i-masu	<b>tab</b> e-masu
連体形	<b>kak</b> i-u	<b>tab</b> e-ru
假定形	<b>kak</b> i-u-体言	<b>tab</b> e-ru-体言
命令形	<b>kak</b> i-e	<b>tab</b> e-ro
未然の意向形	<b>kak</b> i-o:	<b>tab</b> e-yo.

囲み部分が橋本・学校文法の語幹(仮名単位で分ける)
橋本・学校文法の考え方を単音単位にした場合は点線まで(力行サ行 etc. と言う必要なし)
太線までが『よくわかる言語学入門』p. 48のいう語幹

**【自由形態素と拘束形態素】** p. 51

単独でも発話を構成できるか(それだけ言えるか)で区別する。

※テキストには「自由形(自由形態) / 拘束形(拘束形態)」についての説明がないので、以下に補足する。

**拘束形態素**……異形態を持つものもあるが、自由形は存在しない。

**自由形態素の自由形**……単独で発話を構成できる。(それだけ言って沈黙してもメッセージになる。)

e.g. そら、きり、ふね、さけかす(酒粕 ※複合語に含まれるが自由形)

**自由形態素の拘束形**……上記(自由形態素の自由形)の異形態。

e.g. なつぞら、あさぎり、ふなやど、さか だる(酒樽)、いざかや(居酒屋)

## 【内容形態素／機能形態素】 p. 50, 52～

**内容形態素**……概念内容（語彙的意味）を表す形態素。（※指示対象が世界内に存在しなくてもよい）。

**機能形態素**……文法的機能のみを担う形態素。

※テキストは機能形態素の例として「助詞や助動詞語幹」を挙げているが、動詞・助動詞の活用語尾も（形態素として切り分けるのであれば）もちろん機能形態素である。

※テキストは「内容形態素（語根）／機能形態素（接辞）」としているが<sup>p. 50, POINT欄</sup>、「語根」はむしろ以下の②の意味で使われることが一般的。

## 【語根】

- ① 語から全ての屈折接辞と派生接辞を除いた部分。s←テキストp. 50はこの意味で使用。
- ② 現代語において形態素としての独立性を保っているか否かにかかわらず、歴史的に形態素であったもの。語源を同じくする語や形態素は「**同根**」という。（通時態を意識した概念）  
e. g. 「たもと（袂）」の「た」は「て（手）」と同根である。

## 【接辞】 p. 53～

語基に接合される位置によって、接頭辞／接中（挿入）辞／接尾辞に分けられる。接中辞は日本語にはないとされる。マラヨポリネシア(オーストロネシア) 諸語には豊富。

※「接尾語、接尾辞／接頭語、接頭辞」はどちらも使われる。単語ではなく語の構成要素、いわば部品であるから「～辞」の呼び方が適当であろう。

接辞を、何を表すかによって分類すると、「屈折接辞/派生接辞」の2種になる。

※テキストには「屈折/派生」の区別が示されていないため、説明が混乱している。

## 【屈折接辞】

文法的カテゴリー（名詞の格や数、時制etc.）に応じて付加され交替するもの。機能形態素にしか分類できない。

数が限られており、短期間では増減しない。

生産性が高い（一定条件を満たすどの形態素にも付加できる）。

日本語の活用語尾や格助詞を接辞として捉えるのであれば、屈折接辞。

現代日本語の屈折接辞は全て接尾辞である。（古典語の「な+動詞+そ（例: な行きそ）」などの禁止命令するナを接頭辞と考える場合には、古典語には接頭辞の屈折接辞あり。）

〔例〕英語の複数接辞の {-s}、三人称現在の人称語尾 {-s}、過去形を作る {-ed} 日本語の活用語尾 etc.

参考※「品詞を変えないものが屈折接辞」と説明されることもある。この定義に従った場合、日本語の格助詞は名詞を連用修飾語に変える(ただし準副体助詞 {-no-} は連体修飾語に変える)ので、機能形態素ではあるが屈折接辞ではないことになる。

## 【派生接辞】

なんらかの概念的な意味を加えるもの。（接尾辞には）品詞を変えるものが多い(現代日本語では接頭辞は品詞を変えない。現代英語でも品詞を変える接頭辞は稀)。「内容形態素」の定義によっては、（その一部または全体を）内容形態素に分類できる。

流行語として生まれ短期間で廃れることもある。

多くは付くことのできる相手が習慣的に決まっている（生産性が低い）。

〔例〕強さ、強み、ど根性、おに可愛い、shortage、trainee、trainer、enable

**注意!** 英語の現在分詞を作る {-ing} は屈折接辞だが、動詞から名詞や形容詞を作る {-ing} は常識的には派生接辞とされる。

**合成** (形態素と形態素を結合させる造語法) のうち、語基と語基を結合させるものを特に「**複合**」という。(「合成」と「複合」を同じ意味で使う人もいる。) →詳しくは「語彙意味」の科目で

### ●接辞の切り取り方

どの部分を接辞して切り取るかには、大きく分けて2つのやり方(2つのレベル)がある。便宜上、**形態論レベル/語彙論レベル**と呼ぶとすると、

#### (1)形態論レベルの分け方

活用語の活用語尾を、語幹部とは別の形態素で機能形態素であるとみなす。動詞「書く」はkakとuの2つの形態素に分ける。

#### (2)語彙論レベルの分け方

通常、語彙論 (または語彙論の下位分野である語構成論など) では、屈折接辞を接辞としては扱わない。

例えば、語彙論では通常「埃っぽい／利口ぶる／春めく」等は「派生接辞が付くことで成立した語(派生語)であり、下線部は接尾辞である」と説明する。各語の下線部はそれ以上分解せず、「[っぽい]は名詞に付加されて形容詞を作る接尾辞、[ぶる、めく]は名詞や形容詞類語幹などに付いて動詞を作る接尾辞である」と説明する。また「言う、見る、寝る」等は**単純語**または**一次語**(単一形態素から成る語)とみなし、**単純動詞**と呼ぶ。→詳しくは「語彙意味」で

**混乱注意!** テキスト第3章では「接辞」の語がどちらの意味で使われているかが説明されていない。

#### (1)p. 50, L4の説明

「消える、大きい」をkie-ru ooki-iと分け、ruやiは「機能形態素(接辞)」であるとしている。←**形態論レベルの分け方**

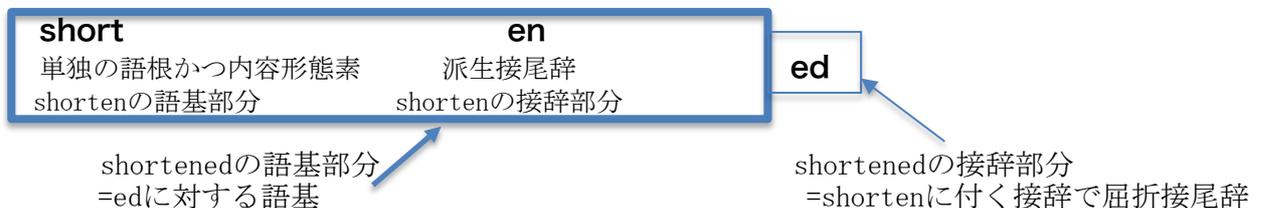
#### (2)p. 54の②の説明

「接頭辞+内容形態素」の例として「か細い、か弱い、すつとばす」等を挙げているが、形容詞や動詞(ほそい、よわい、とばす)の活用語尾を「機能形態素である接尾辞」として分けることはしていない。←**語彙論レベルの分け方**

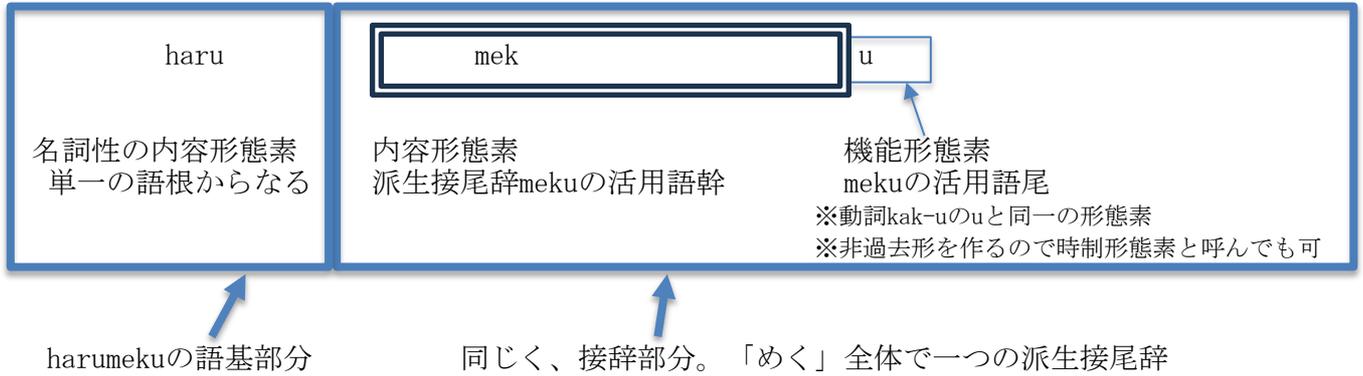
#### (3)p. 55, L. -8の説明

「押し出す」は「動詞語幹+連用形語尾+動詞語幹+時制形態素(-uは非過去を表すという考え方による)」であって「接辞が含まれる」。←**形態論レベルの分け方**

英語の「shortened(動詞shortenの過去形・過去分詞形)」は:



「春めく」は：



「偉ぶる」も同様。

- {era-} ……形容詞「えらい」の活用語幹（語基であり内容形態素）
- + {-bur-} ……5段動詞型に活用する派生接尾辞「ぶる」の活用語幹。
- + {-u} ……屈折接辞。（派生接辞「ぶる」の活用語尾）

#### 5) 構造主義とは何か（テキスト第4章 p.58～）

この章には、特に誤解を生むと思われる箇所は見当たらない。以下、若干の補足をしておく。

#### 【サピア=ウォーフの仮説】 P.65 コラム参照

言語相対論とも。ソシュールは、各民族の言語はその言語固有の世界像を持つ、と述べており、言語相対論はソシュールに始まるとも言える。

エドワード・サピアとベンジャミン・L・ウォーフ（どちらも米構造主義の言語学者、19世紀末～20世紀前半の人）が、アメリカ先住民の言語の研究に基づいて唱えた。ある人の母語がその人の世界観やものの見方に影響するという仮説（または彼らの仮説からスタートした言語と認知・思考に関する諸理論）。

現在では一般に、母語のみではなく**継母語**も影響すると考えられている。

言語生得説に立つチョムスキー言語学の一派はこの仮説に批判的。その後、認知文法・認知言語学のグループは、言語と認知の関係について実証的研究を行っている。

#### 【構造主義】 p.60～

一般に、構造主義言語学はソシュールから始まるとされる。ヨーロッパでは、マテジウスらのプラーク（プラハ）学派、イェルムスレウらのコペンハーゲン学派、フランスのマルティネらが代表。

「アメリカ構造主義言語学」……20世紀前半、アメリカ先住民の言語の研究の中で生まれたもので、ソシュールの直接的影響は小さい。音韻研究に大きな成果を上げた。ブルームフィールドらによって発展。

cf. 「ヨーロッパ構造主義」……特に20世紀後半に入ってから、記号論・言語学・哲学・数学・文芸批評・文化人類学などにまたがる思潮。アメリカ構造主義言語学と同じく、根底には不可知論がある。研究対象を構成要素に分解し、各要素間の関係や構造に注目する。この意味での構造主義が出題される可能性は、極めて低い。

6) 統語論の展開と生成文法、その後の研究<sup>58~</sup>

## 《変形生成文法の考え方》

チョムスキー『文法の構造』(1957)に始まる文法論。チョムスキー自身によって何度も枠組みが書き換えられており、いまだ固まっていない。

実際の言語運用だけでなく、その基礎となる言語能力の解明が必要であるとする。

過去に発せられた文だけでなく、将来発せられる文法的なすべての文を説明でき、また非文法的な文の生成を許さないような規則の集合を作り上げることを目指す。

個別言語を超えた共通性・普遍性に注目する。

現象面の奥にひそむ「深層構造」を仮定し、同形異義文や異形同義文を統一的に説明しようとする。→レイコフらの生成意味論・フィルモアらの格文法などに発展。上記の特徴はこれらにも共通している。

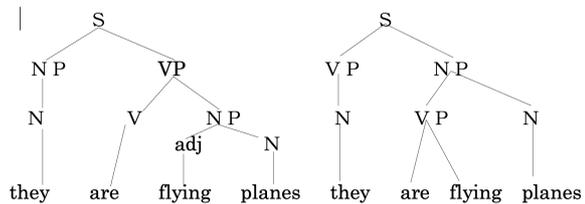
## ●言語能力 (competence) / 言語運用 (performance) p.66~

前者は、話し手が有する言語に関する知識や能力で、これにより言語による意志疎通を可能になる。後者は、この能力によって現実の場で行われる一回一回の言語活動。

ソシールによるラングとパロールに似ているが、ラングは社会的色彩が強く、静的な概念であるのに対し、言語能力は個人的・動的な性格をもつ。

## ●深層構造 (deep structure) / 表層構造 (surface structure) p.81~86

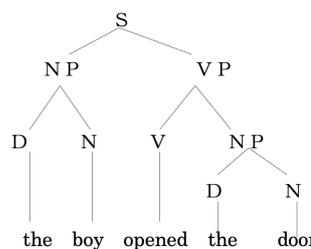
表層構造は抽象的構造であるが、語彙や配列が現実の文と同じである。深層構造は、表層構造の基底にあって文の意味を規定する、より抽象的な構造。深層構造から変形という操作によって表層文が生みだされるとする。



チョムスキーは「#The door opened the boy.」のような不適格文を排除するため、動詞 open は主語に生物名詞、目的語に無生物名詞を要求する、として選択制限を課した。

## ●句構造標識 p.70~

生成文法による統語構造の表示→



「boy」の統語素性→

+N	+concrete
+common	+animate
+count	+human
	+common

## 近現代の言語学の流れ

## 19世紀までの言語学研究

言語の研究は古典語の研究から始まった。(前4C頃 パーニニのサンスクリットの文法書)

1786年、W・ジョーンズの講演。→印欧語族の発見と比較言語学の誕生につながる。

## ●比較言語学……文学者 F.シュレーゲル(1772~1829)が始祖?特にドイツ青年文法学派が活躍した。

系統/共通祖語/語族・語派、諸語/姉妹語/音韻対応/等の概念を提出。

## ●19C~言語地理学・方言学の研究が始まる。

等語線(isogloss)/言語地図/圏論と区画論/「古語は辺境に残る」/(同音衝突)

## ●言語類型論……シュライヒャー(1821~68)の古典的3類型(屈折、膠着、孤立),「言語の進化」論

→〈20世紀以降の類型論〉語順類型論/統計的普遍則/枝分かれ/母音体系

## ●F・ド・ソシール(1857~1913)……記号学の祖,近代言語学の父とも。

「言語は概念を表す記号の体系」~『一般言語学講義』(←1907~1911年の講義に基づく)

ラング、パロール、ランゲージュ/通時言語学と共時言語学/能記と所記/記号と象徴/記号により概念が成立する/記号の恣意性/意味は体系により規定される/示差的ということ、差異と対立/統一的(syntagmatic)連合的(paradigmatic)/線状(線条)性/等、多くの言語学の基礎概念を提出した。

- プラーク(プラハ)学派.....音韻研究に成果。機能的・心理的側面に着目。
  - ・ トウルベツコイ (1890~1938)……音素という単位を提唱、音韻論独立のきっかけを作る。  
有標項と無標項/音韻の2項対立(欠如的・漸次的・等值的) / 母音類型論
  - ・ ヤーコブソン(1896 露~1982 米)  
「音素は弁別特性の束」 / 12 の弁別特性 / 能記は完全に線状か? / 能記は完全に恣意的と言えるか?
- ロンドン学派  
実際の場における言語使用の研究に重点。表面的構造と言語的機能 の関係の解明。オースティンの遂行分析(語用論)が有名。
- その他のヨーロッパ  
マルティネ(1908~1999)二重分節、コペンハーゲン学派のイエルクスレウ etc.
- アメリカ構造言語学  
アメリカ先住民の言語を記述。帰納法による言語研究。現象面から言語を捉える。言語と認識の関心に注目。反心理主義、行動主義、機械的言語観。  
言語の階層性を重視。音韻論・形態論を整備。特に音韻論に大きな成果。  
直接構成素(IC)分析を考案するが統語論に行き詰まりを見せる。
- ・ サピア(1884 ドイツ帝国領生~1939)……人類学者、アメリカ構造言語学を主導。  
言語相対論/諸言語を平等に眺める / 「言語は概念や感情を記号体系によって通信する人工的・非本能的な方法」 / サピア=ウォーフの仮説
- ・ ブルームフィールド(1887~1949)……アメリカ構造主義言語学の立役者。  
行動心理学の応用 / 「言語獲得は習慣形成」 / 刺激と反応 / 極度の客観主義/機械的なものとして人間と言語を捉える。  
→ オーディオリンガルメソッド等の語学学習理論に大きな影響を与える。
- 変形生成文法  
チョムスキー『文法理論の諸相』1965 年から始まる。構造言語学に対するアンチテーゼ。認知心理学の応用。母語話者の内省から出発。さまざまな仮説を前提とする。一種の普遍主義。  
いまだ発展途上? 理論の枠組みが激しく変遷。例えば「標準理論」では変形は意味を変えないと考えられたが、「拡大標準理論」では意味を変える変形も認めた。同じ学派のなかでも論が分かれる。毀誉褒貶が甚だしく、評価が固まっていない。
- ・ チョムスキー(1928~)  
「言語獲得装置=LAD」仮説 / 曖昧文の分析 / 深層構造と表層構造 / 変形規則 / 代入規則 / 形態素の交替を音韻規則で説明。音韻規則を文法のなかに組み込む。
- ・ その影響(1970 年代頃~)  
生成意味論 フィルモア、レイコフほか。他動詞文・自動詞文・形容詞文などを統一的に説明する試みも。語用論も取り込む。
- ・ 格文法 フィルモアほか。深層格と表層格を立てる。深層構造に格関係を組み込んで同義文を統一的に説明。
- 言語獲得の臨界期仮説  
チョムスキーの言語獲得装置仮説とともに論じられることが多いが、提唱者はレネバーク。ある年齢=臨界期を過ぎると母語話者と同等の言語習得は難しくなるというもの。
- 認知言語学・認知意味論 フィルモア、レイコフら。比喻を人間の重要な認知能力と関わるものとして重視。カテゴリー化、プロトタイプ理論など。  
レイコフは師であるチョムスキーの生成文法から離れ、認知言語学を提唱。
- ・ 認知文法 ラネカーが 70 年代に創設。生成文法やそれ以前の言語学と異なり、言語の抽象的な規則を設定しない。記号構造(意味構造と音韻構造)と、それらの構造のスキーマ、および構造間のカテゴリー的関係性が言語の構成要素であるとする。心理学的な認知と言語の関心に注目。
- 言語学の新しい分野
  - ・ 社会言語学…言語変種の研究 / 位相とレジスター / 混成言語 / 語用論 / 談話分析
  - ・ その他 認知言語学、言語心理学、言語人類学、その他の学際的研究
  - ・ 「身振り言語」 / 「動物の言語」 / 点字・手話研究 / 失語症研究 / 人工言語/自動
  - ・ 計量言語学 / コーパス言語学 / 自動翻訳 / コンピューターによる言語処理 etc. → AI の進歩で飛躍的に発展する可能性あり。